

没落士族のナショナリズム

— 明治初期の政治小説 —

野村 幸一郎

はじめに

矢野龍溪『経国美談』は、全編が明治一六年三月、後編が明治一七年二月、いずれも報知社から刊行されている。谷崎潤一郎の「幼年時代」には、『経国美談』にまつわる次のようなエピソードが記されている。

稲葉先生は此の少年たち（筆者注、『経国美談』に登場する、後に「斎武ノ国勢ヲ振興シ遂ニ斎武ヲシテ一タヒ列強盟主ノ地位ニ立タシメタル英雄」となる「少年たち」を指す）が雪白の老翁から、昔アゼンスがスパルタに攻められて国都も危うくなつた時、アゼンスの賢王格徳が身を犠牲にして国難を救つた話や、又アゼンスが人民の利害を顧みない寡頭政治の天下になつて苦しんでゐた時、士良武と云ふ英傑が出て虐げられた人々を鼓舞し、軍勢を糾合して三十奸党を平げ、再びアゼンスを本来の民政国に復した話を聞いて大いに発奮し、自分たちも将来は国家のため人民のために力を盡したいと考へて、互にその志を述べ合つたと云ふところまでを語り、⁽¹⁾

谷崎が産まれたのが明治一九年七月であるから、おそらくこの回想で語られた体験は、明治三〇年前後の出

来事であつたはずである。この挿話の興味深い点は、ここで登場する稲葉先生が国家のため人民のために我が身を捧げることが奨励するような教訓話として、『経国美談』を紹介しており、谷崎をはじめとして子供達もそれを違和感無く受け止めている点にある。この挿話においては、『経国美談』に描かれた〈政治なるもの〉が自由民権思想ではなくて、国家や人民への貢献の有無が個人の生の意味と無意味を決定するような価値軸として、提示されている。

本論では、谷崎の回想から浮かび上がってくる、政治小説に内包された、このような（もう一つの政治性）について考えてみたい。しかし、翻案小説の場合、作品が成立した同時代の社会的環境がかならずしも直裁には表現されていない。むしろ回避されている面を持つ。そこでここでは、翻案小説も視野に入れつつ、主に作者の分身であるとおぼしき没落士族を主人公とする東海散士の『佳人之奇遇』を中心として考察をすすめていくことにする。その際、重要なのが、明治初期における藩体制の崩壊を背景として形成された士族階級のエトスや自由民権運動との関わりであるが、この問題についてもあわせて考えていきたい。

「保存する個人」と「世界史的個人」

『経国美談』と同じく、登場人物の生存様式そのものが、歴史性を帯びているという点では、デュマのアンジュ・ピトーの翻案小説である宮崎夢柳の『自由の凱歌』⁽²⁾や、ステプニャクの『地底のロシア』の翻案小説である『鬼啾啾』⁽³⁾にもあてはまる。徳富蘆花は、『思出の記』⁽⁴⁾において、「一三年前三国志に耽つて張波の長坂橋に胸を轟かした僕等は、今『西洋血潮小暴風』『自由の凱歌』など云ふ小説に余念もなく食ひ入る時となつた」と回想している。三国志のような、英雄が活躍する冒険活劇として、『西洋血潮小暴風』『自由の凱歌』もまた、

同時代において受容されている。

たしかに、『自由の凱歌』のアンジュ・ピトーは、「バスチール監獄」に閉じ込められた義父、ギルベルトの救出を動機の一半として、フランス革命に参加している。作品のところどころには語り手の言葉として、「仮初にも同等の権利を稟けて人間と此世に生まれ出しものゝ、争で他人に圧制され束縛さるゝことやあるべき。彼れ既に天地の公道に背きたり」というような、自由民権思想を鼓舞する言辞も挿入されているが、思想そのものは物語の後景に退いている。言い換えれば、ピトーが民権思想に共鳴し、共和制の実現を目指して「バスチール」を襲撃するというように、政治思想そのものが物語の筋に直接関わる形では登場していない。物語の前景に押し出されているのは、やはり、義父を救出するために「バスチール監獄」に向かうピトーやピロウの姿である。

『鬼啾啾』のソピア・ペロウスキーの場合、政治信条についてはピトーと比べて一層、自覚的ではある。しかし、やはり虚無思想そのものは物語の筋に絡むことなく、作品の後景に退いている。物語の前景に押し出されているのは、ソピアやブラントネルが繰り返し返す要人襲撃の顛末、リソップとブラントネルによるクロパトキン脱獄の手助け、そしてソピアの英雄的な死である。

もちろん、板垣退助らが編集した『自由党史』⁽⁵⁾で「恐怖せる抑圧政界の結果は明らかに民間党を窮迫して言論を嶮岨ならしめ」「筆墨の外に人身を伝神することに勉め、或は政談講演を廃して講談演芸に託し、巧に法網を脱して思想の啓導を勉むるにあり」と語られているように、度重なる官権による言論取り締まりの中で、政治小説に寓意性を持たせる必要があったことは事実である。しかし、これらの作品が、自由民権思想の信奉者を鼓舞し、新政府を震撼させることはあったとしても、もう一方で、『経国美談』と同じように、ピトーやソピアの英雄的行動を描いた物語として受容される側面が存在したことも、否定できない。

ルカーチは『歴史小説論』において、ヘーゲルの歴史哲学を援用しつつ、歴史小説の登場人物を、「保存する個人」と「世界史的個人」に分類している。ここで言う「保存する個人」とは、個々の人間の個人的、私利私己的な営みの中で、市民精神・シティズンシップなどの倫理的価値、さらには市民社会を再生産していく担い手を意味する。「世界史的個人」は、「保存する個人」を基盤として成立した、世界史との関わりの中で、つまり封建社会から近代市民社会へという歴史的進歩との関わりの中で、自らの生や言動を意味づける存在様式を持つ存在である。ルカーチによれば、歴史小説において重要なことは、歴史上の事件を再現することではなく、その事件の中で形成された人間を芸術的に描き出す点にこそ存在する。大切なのは、どのような社会的原因が人々を歴史上どのように考えさせ、感じさせ、行動させたかを、追体験できるようにするところにある。「保存する個人」の場合、ある巨大な歴史的イベントが勃発した結果として引き起された、個々人の生活レベルの事件を、自分の生活の直接的な危機として感じるが、「世界史的個人」の場合、事件を歴史的進歩の中で意味づけ、そこから自分自身の行動原理や大衆行動の指導原理を引き出してくる。したがって、「保存する個人」においては、その人物が平凡であればあるほど、歴史的指導者としての才能が少なければ少ないほど、日常の言動の内に、生活上の危機意識が、より生き生きと描き出される結果となる。⁽⁶⁾

ルカーチが提示したこのような図式をもとに『自由の凱歌』『鬼歌』の理解を試みたとしても、それほど違和感はないはずである。『自由の凱歌』の場合、ピトーが革命運動に従事する義父を心配する思いが、そのまま絶対王政への敵意と直結している。つまり、ピトーは、歴史上の危機を日常生活上の危機を深刻に感じる「保存する個人」という側面を持っている。『鬼歌』のソピアは、市民社会の成立という歴史的「進歩」との関わりから、自らの生と死を意味づける英雄として描かれている。『鬼歌』の結末近くには、死刑に処せられることになったソピアについて次のように描かれている

ソヒアは大事(筆者注、「安歴山得第二世」襲撃を指す)を行ひながら、実に大胆不敵にも、更に憚るところなく、依然都城に潜在し、捕へられて、リソツプ等と裁判所へ送らるゝや、自ら其の犯罪の跡を掩はん為めにもあらず、又た傲るにもあらざれど、顔色より挙動まで少しも平素に異なるなくして、談笑自若たるを、見聞く法官始め係りの人々いづれも皆な、敵ながら天晴れの人物かなと、心密かに其の氣迫の剛勇なるを嘆ぜしとか

さらにその後、作品では、「早速所刑の日も近かるべくと存じ候得ば、猶は一層御悲嘆の程御察し申上候。去りながら此度の一条は、兼ねてより覚悟のことに候ゆゑ」「却つて世の人々の為めに企て候日頃の本望相遂げ候段、心の中に深く喜び申居候」と、ソヒアが死に際しての思いを綴った母親宛の遺書が続く。作品の結末近くに描かれているのは、虚無思想ではなくて、あきらかに歴史の《進歩》のために身を捧げ非業の死を遂げる英雄、「世界史的個人」の姿である。そして政治的寓意性は、結末に至って作品から完全に姿を消してしまっている。

《亡国》という心傷

以上を前提として、東海散士の『佳人之奇遇』⁽⁷⁾を考えてみたい。作品は、主人公の散士(作者と同名、以下、区別するために、主人公と記す)が、フィラデルヒアの独立閣の樓上で、アメリカの独立戦争に思いを馳せるところから始まる。そして、スペインのドン・カルロス党員の幽蘭、アイルランド独立運動に献身する紅蓮という二人の女性に巡りあい、明朝の遺臣鼎范卿を交えて、憂国の至情と独立の悲願を語り合う。その後、主人公と二人の女性との別離と邂逅の過程で醸し出されるプラトニックな恋情や幽蘭の異境漂、主人公が見聞した、

エジプトやビルマなど世界の弱小国が欧米列強の植民地とされていく様が語られていく。

『佳人之奇遇』のとくに巻一から巻三においては、これらの挿話と、主人公が情熱的に語る憂国の情が、一種の政治的ロマンティズムを醸しだし、政治的主張それ自体は作品の後景に退いている。飛鳥井雅道が指摘する「佳人之奇遇」を支えている文体の魅力が、そのイデオロギーによるものだけではありえない問題⁽⁸⁾は、ここに存在する。そして、このロマンティズムこそ、『佳人之奇遇』のもうひとつの政治性を形成している。この作品に描き込まれた「政治的なもの」とは、何よりも憂国の情を激しく語る主人公や幽蘭、紅蓮が体现する、個人の生を歴史との関わりの中で意味づけるような存在様式そのものである。

この問題を考えていくにあたって重要な点は、作者、東海散士と同じく、主人公もまた会津の遺臣として設定されているところにある。幽蘭、紅蓮、鼎范卿の話聞いた主人公は、「散士も亦亡国ノ遺臣、彈雨砲煙ノ間ニ起臥シ生ヲ弧城重圍ノ中ニ偷ミ、国破レ家壊レ窮厄万状辛酸ヲ嘗メ盡ス。何ゾ令嬢等ニ譲ランヤ」と語る。回想は、白虎隊の自刃、主人公を含めた兄弟の参戦と祖母や母、妹の死、会津藩の降伏へと進み、さらに無数の藩士とその親族が、ある者は自刃し、ある者は縊死し、ある者は火の中に身を投じと、つぎつぎと死んでいった様子が事細かく語られていく。故国滅亡にまつわる慚愧の念が、激しく語られる箇所である。

その中であつて生を選んだ者は、会津藩「主将」の「空シク死シテ名ヲ滅センヨリハ、恥ヲ忍ビ生ヲ全フシテ一旦外患アルノ日誓テ神州ノ為メニ生命ヲ鋒鏑ニ委シ、而シテ是非正邪ヲ死後ニ定メンニハ若カズ」ということばに説得された者達である。主人公ももちろんその中の一人であり、だからこそ、「今ヤ外人禍心ヲ包蔵シ神州ヲ蔑視シ」「俄独ハ勢威ヲ頼ミテ驕傲シ、英仏ハ狡知ニ老ケテ蕩逸シ、我ニ飲マシムルニ美酒ヲ以テシ我ニ贈ルニ翠羽ヲ以テス。其酒其羽往往鳩毒ノ製スル所、我士民之ヲ受ケテ而シテ未ダ疑ハズ」「且ツ彼口ニ仁義ヲ誦シテ而シテ桀虜ノ行アリ。表ニ天道ヲ説キテ裏ニ豹狼ノ欲ヲ抱ク。亜細亜北部ハ彊俄ノ為メニ并セラレ、

南方印度ハ英王ノ臣妾トナリ、安南ハ仏国ニ隸屬シ、土耳其清国モ亦萎微已ニ亡滅ノ運ニ傾ケリ」と、欧米列強の帝国主義的な外交政策を前にした国家の行く末を深刻に憂えることになる。また、主人公に言わせれば、「国家の盛運」を実現し植民地化の危機を脱することによって「自由始メテ伸ビ」るものであり、ここに「民権」国権」型の政治思想⁹を見ることもできる。

これまで繰り返し指摘されてきているように、アイルランドやスペインの独立問題への主人公の共感、会津藩滅亡を体験した散士の士族の実感に基づいている。逆から言えば、没落士族であつたからこそ、主人公の歴史的自覚において民権と国権が一致し得たことになる。

このような主人公を、先に論じた『自由の凱歌』のピトーや『鬼歌』のソヒアと比べてみた場合、無論国家に対する姿勢という点において決定的な違いがある。具体的に言えば、ソヒアが体現するような「世界史的個人」とは異なり、『佳人之奇遇』の主人公においては、その歴史的自覚の中身が、共和制の実現から、植民地化への危機意識へと入れ替わっている。作品を取り巻く政治的環境については後に論じるとして、一旦、このような違いが生じるに至つた原因を、作品の筋立ての中に求めた場合、歴史的自覚にいたる、過去に負つた心傷の中身が『佳人之奇遇』の主人公の場合、まったく異質であることに思い至る。ピトーの場合は、革命運動に身を投じた父の拉致監禁が政治参加の動機を形成しているに対して、『佳人之奇遇』の主人公の場合、故国滅亡が動機となつている。主人公もまた、肉親の死を体験していることはいはるが、それすら「国破レ家壊レ窮厄万状辛酸ヲ嘗メ盡ス」とあるように、はじめから歴史的に意味づけられている。まったく個人的な生活上の危機から歴史的自覚にいたるというプロセスとは異なり、はじめから歴史的な自覚の中で、つまり会津士族として生きていた主人公が、その自覚の中で負つた心傷を媒体として、新たな歴史的自覚を構築しその中で生きるというプロセスをたどっている。

このような違いが生じた背景として、東海散士が置かれた特異な境涯や個人的な政治信条に帰することももちろん可能である。しかし同時に、当時の政治的環境、つまり、藩体制崩壊にともなうて全国に満ちあふれることになった旧士族が、同時代の政治活動において中心的な役割を果たしたという歴史的事情に、その原因を求めることもできよう。散士自身は自由民権運動には参加してはいないものの、やはり、政治を志す明治初期の士族の一人であることは、言うまでもない。

士族達の市民精神

ここで士族階級に共有されていた思维様式、儒教的エートスの内実について確認しておきたい。丸山真男は、江戸期の侍階級の思维様式においては、自身が帰属する共同体の意志と個別的な個人的利害関心との間に現実の乖離が生じようが無かったと論じている。朱子学的思维様式においては、「自然界の理（天理）は即ち人間に宿つてはその先天的本性（本念の性）となり、それはまた同時に社会関係（五倫）を律する根本規範（五常）でもある」。すなわち、人間存在には先天的に社会秩序の根本規範が内在することによって、本然の性として、仁義礼智を希求し、士農工商によつて構成される階層秩序を支えたと見なされたわけである。⁽¹⁰⁾とするならば、個人的なるものはすべて一般的なるものに一致し、それゆえに価値ありとされることになる。逆から言えば、もし一致しなければ、個人の意志は道徳的な意味において悪であり墮落であり、そのような生の在り方は、なんら考慮に値しない、無意味なものとなる。

以上のことを前提とするならば、明治維新にともなう藩体制の崩壊は、士族にとつて、倫理的墮落を意味する側面を内包していたと、見なければならぬ。藩体制の崩壊は、士族から共同体への帰属感を奪う。それは

すなわち、普遍的価値に通じるような倫理的主体としての〈私〉の喪失を意味していたはずである。とくに『佳人之奇遇』の主人公の場合、会津藩が「反賊ノ臭名」の負うことになったわけであるから、二重の意味で倫理的墮落を実感しなければならない。作品において主人公は、「只恨ムラクハ我公（筆者注、会津藩主松平容保を指す）」多年ノ孤忠空ク水泡ニ帰シヲ反賊ノ臭名負ウヲ。是レ終天ノ憾ミ海枯レ山翻ルトモ消工難シ」と語っている。

「我公」が「反賊ノ臭名」を負う以上、忠節を尽くした自身も汚名を負うことになる。それは、自らの存在が普遍的価値に通じるような回路ははじめから不在であったことを意味する。儒教的エートスを存在原理とする主人公にとってみれば、それは自らの存在を否定することに等しい。一言で言えば、神（この場合は藩や君主を失った近代人の幸福はいかにして可能かという問いが、『佳人之奇遇』の主人公には突きつけられている。

この点では、自由民権運動に従事した同時代の士族達にしても、同じ状況に立たされている。民撰議員設立建白の関係者であった岡本健三郎、小室信夫、古沢滋が記した「民選議員弁」には次のような記述が存在する。

四民ノ中ニ就キ独リ士族ハ則チ其ノ従前ノ地位大ニ他ノ三民ノ上ニ在リ、而シテ稍々其ノ所謂万物ノ靈タル本然ノ貴ヲ保存シ得ル者二近シ。唯ダ此ノ一事実即チ能ク今日士族ヲシテ其ノ国家ヲ憂念スルノ心独リ四民ニ冠タラシムルヲ致セシ所以ナリ（中略）然ルニ今將ニ淪胥シテ相共ニ陥没セントス。豈ニ急ニ之レヲ救済スルノ道ヲ立テザル可ケン哉（中略）故ニ曰ク我人民ヲシテ愛國愛君ノ心志敢為勇前ノ氣風ヲ興起旺盛ナラシメント欲ス、応サニ須ラク速ニ斯ノ議院ヲ設立ス可シ（1）

四民の中で一人士族のみが国家への帰属感を抱き、国家と自己を同一視する倫理的主体として、定位されている。しかし、その士族も国政参加の道が閉ざされるままでは墮落せざるを得ない。それゆえに、民撰議院を設立せよというのが、ここでの主張である。

同様のことは、明治八年三月二〇日から四月七日までの『郵便報知新聞』論説文においても主張されている。⁽¹²⁾ 無産階級である士族に選挙権を与えるべきかをテーマにして書かれたこの論説文においては、繰り返し士族の政治参加が主張されている。その理由を記者は、「今我々のソサエティより士族を除きて残りたる物は如何なるものぞ無氣無力の従順愚民どもと有力有氣は圧政政府ならん如此き有様より起る結果を見るに圧制は益圧制従順は益従順人民の人民たる真の幸福を得るを能はざるは疑を容れず」(三月二十六日)、「今外国に對峙し我國をして甚しく恥辱を蒙らしめざるの士族高尚の氣風養ひ諸般学科を講習し西洋文明の風を伝ふるの士族を放逐して之を無氣無力の平民に任ぜば果して能く日本国の獨立を維持し得可きや」(三月二十八日)と、記している。士族以外の、ここで言うところの平民階級は、いまだ「無氣無力の従順愚民」に過ぎず、西洋文明を吸収し得るような教養も能力も備わっておらず、また、「獨立の氣風」もない。だからこそ、国家的獨立を堅持するためにも、共和制を実現するためにも、平民階級はひとまず置いて、士族階級をまず国政に参加させなければならぬというのが、ここでの主張である。また、四月七日の『郵便報知新聞』には、このような論説文に刺激を受けた投書文が掲載される。そこでは、「現今の士族なるものは我邦の『ミドルクラス』即ち中等の位置にある者にして、『パブリック、スピリット』即ち公志なる者は必ず此人の所有ならん」「士族をして先鞭を着けしめ以て平民の自棄心を刺激し暫時貴重なる公志を移して後來俱に國權を維持せんと欲するなり」と語られている。公に對する私の責任意識を促すような、西洋のパブリックスピリットにあたるものこそ、士族が所有する儒教的エリートスであり、したがって士族の國政参加を通じてそれを平民に感化していくことによってのみ、日本の國家的獨立は堅持し得ると、ここでは主張されている。

そして、『佳人之奇遇』の主人公もまた、作品において「士風壞頽德義地ヲ払ヒ、朝ニ民權ヲ主張セシ者タニ官權ニ呼号シ、甘ジテ轅下ノ駒トナリ、士ニ常操ナク議ニ確論ナシ」「嗚呼此大難ヲ救済挽回スルノ策果シ

テ如何セン。上下小怨ヲ棄テ旧惡ヲ捨テ、私心ヲ去ツテ公義ニ従ヒ」『国権恢復ヲ以テ各自ラ任ジ、国家ノ盛運ヲ以テ自ラ期シ』『四民心ヲ一ニ耐久努力セバ、厄漸ク去リ、自由始メテ伸ビ、国家ノ富強文明ハ期シテ待ツベキナリ』と語っている。たしかに、『佳人之奇遇』においては、国会開設のスローガンはかかげられてはいない。しかし、それを除けば「民撰議院弁」や『郵便報知新聞』の主張とはほとんど同じである。共和制の実現が国家的独立の堅持かはともかくとして、いずれの言辭も、何らかの国家的目標について、士族のエートスをそこに振り向けることによつて、実現が可能となると主張している。言うまでもなく民権論は明治一四年一〇月の自由党設立から一七年一〇月の解散までの間に盛んに唱えられ、国権論は明治一九年から二一年頃までの条約改正運動を背景に登場しているわけだが、民権論・国権論を問わず、士族階級の精神的崇高性、あるいは精神的特権性の保存を、それぞれの政治的主張のコアの部分に、内蔵している点では、まったく一致している。

また、このような主張は、その反面として、志操の高低によつて人民を積極的に差別することが必要であるという主張と連なっている。先の文献の多くが農工商の三民の無知蒙昧さや徳義の欠如無気力さを指摘するのはそのためである。その中であつて作品の主人公は、さらに一步進んで、「我国ノ士人志遠大ナラズ。多クハ小成ニ安ジテ歌舞遊蕩開基抹茶ニ耽リ、書画骨董ヲ玩ビ、以テ一日ノ富貴ヲ偷ミ、唯々一二州ノ歛心ヲ得ルヲ務メ、私怨ノ為ネニ公道ヲ忘レ、情義ノ為メニ傭人ヲ任ズ」「是レ散士ガ日夜胸臆ニ積テ国家前途ノ大計ノ為メニ悵悵憤懣スル所以ナリ」と、国政に参加する士族への批判へと進んでいる。薩長を中心とした国政に参加する士族は、儒教的エートスをもはや失い、耽美享楽や名利に心を奪われ、国家を私化している。逆から言えれば、いまだ克己心を失わず、志操を保つ自分こそ、国家有用の材としての資格を持ち、国権維持の礎石たり得るということになる。主人公は、士族階級ではなく自身の精神的崇高性として語ること、精神のレベルで自

己と政府部内の士族との優劣を逆転し、さらに国政参加資格の優劣まで逆転している。

ここで、福沢諭吉の『学問のすすめ⁽¹³⁾』に記された、「古の政府は民の力を挫き、今の政府はその心を奪う。

古の政府は民の外を犯し、今の政府はその内を制す。古の民は政府を視ること鬼の如くし、今の民はこれを視ること神の如くす」という言葉に注目してみたい。この言葉は、実は『佳人之奇遇』の主人公をも含めた同時代の士族にそのままあてはまる。自由民権という言葉とは裏腹に、士族が望んでいるのは、実際には不自由、いわば自由からの逃走である。かりに、自由という言葉は何ものにも束縛されない状態という意味で理解するならば、国家への帰属感に是が非でもすがりつきたいとのぞむことなく、現状を肯定することこそ、もつとも自由であるはずである。しかし、藩を失い純然たる人間という事実をのぞくとそれ以外のいかなる特性や関係を実現には失ってしまった『佳人之奇遇』の主人公をはじめとする士族たちは、政治参加主体、すなわち、〈市民〉あるいは〈国民〉というような新たな仮想的実在として〈私〉を再構築しようとしている。そうすることよって、個人意志を越えて普遍、あるいは一般意志に通じるような座標軸を取り戻そうとしている。だからこそ、彼は、「米人が能ク私心ヲ捨テ公議ニ依リ国家ノ為メニ盡スノ心肝」を理想視するのである。

しばしば、国権と民権の一致を、一種のねじれ現象として指摘する言辞を目にするが、以上のような経緯を念頭に置かならば、明治初頭、士族にとって、あるいは『佳人之奇遇』の主人公にとって、人間であることと市民や国民であることを等号で結びつける〈近代精神〉とは、国家主義者であろうとする決意でなければならず、市民精神とは、ナシヨナリズムでなければならなかったと、見るべきである。それは、思想上の問題ではない。より具体的な、士族が置かれた政治的環境に基づいている。ナシヨナリズムを内包する市民精神のみが、士族達を、幕藩体制崩壊後の精神的墮落から救済し、〈市民〉・〈国民〉という新たな政治参加主体Ⅱ倫理的主体として、〈私〉の存在様式を再編成するきつかけを与えることができたからである。

郷土愛と国家愛の融合

しかし、土佐民権派はともかくとして、『佳人之奇遇』の主人公の場合、会津藩の遺臣がなぜ維新政府と自らの運命を同一視するような、ナショナリストであり得たのか。

散士の弟である柴五郎は、西南戦争勃発の折を回想して、次のように語っている。

三月二十七日、四朗（筆者注、散士を指す）兄の書に接す

「今日薩人に一矢を放たざれば、地下に対して面目なしと考え、いよいよ本日西征軍に従うため出発す。

凱旋の日面会すべし。学業怠るなかれ」

病弱の四朗兄、床を蹴つての出陣なれば、まことに心痛の極みなれど、余もまた征西の志、胸中にたぎり、闘志炎となれる砌なれば、あえて兄の壮途を止めず⁽¹⁴⁾

散士は西南戦争に際して、亡国に追いやられた会津の恨みを晴らすべく参戦しているわけであるが、ということは、それは同時に新政府に荷担していることも意味しているはずである。薩長であろうと新政府であろうと、会津の敵である点では一致していなければならぬ。前田愛は『佳人之奇遇』について、「会津藩への封建的忠誠が日本ナショナリズムへと転轍されたように、スペインの辺境は、ヨーロッパの辺境へと拡大されたのである。こうしたカルリスタ運動の性格規定が、散士の『士族的実感』をよりどころにしていることはいうまでもない」「祖国の独立を希求してやまないかれらの『義』は、同時に散士自身の士族的エートスの投影なのであった」と論じている。⁽¹⁵⁾ たしかにその通りなのだが、ではなぜ散士は「会津藩への封建的忠誠が日本ナショナリズムへと」なんらの葛藤をとまなうことなく、容易に「転轍」し得たのかという問題は、不明のまま

ある。

そして、散士、そして主人公のナシヨナリズムには、もう一つ分かりにくい点がある。それは郷土愛と国家愛という二つの帰属感が齟齬をきたすことなく共存している点である。郷土愛は中心である自分から波紋状に広がっていき、その濃度は距離に反比例するから、郷土と比べて抽象性が高い国家に対しては親近性が薄からざるを得ない。したがって、郷土愛は国家愛を培う以上に桎梏として作用する場合もある。国家愛は郷土愛の揚棄を通じて自らを前進させなければならない。⁽¹⁶⁾しかし、『佳人之奇遇』の主人公の場合、故郷会津藩の滅亡を経験した自分であるからこそ、国家の危機を常民以上に深刻に実感し得る国士たり得ると言うのであるから、まったく逆である。主人公においては、滅亡した郷土への愛が、桎梏として作用することなくそのまま国家愛に拡大されている。しかも、彼は自身が体験した会津滅亡とそれにまつわる慚愧の念こそが、自らを卓越したナシヨナリスト(あるいは、近代的市民・日本国民)たらしめていると、自負しているのである。

このような主人公の思惟様式を理解するにあたって、『佳人之奇遇』に語られた次のような明治維新観を確認しておく必要がある。

將軍慶喜公英才ヲ以て国歩ノ艱難ニ當リ、侯伯ト旧ヲ解キ弊政ヲ除キ国權ヲ復シ、以テ大ニ為ス所アラント欲ス。然レドモ病膏肓ニ入り又之ヲ如何トモスル能ハズ。遂ニ大政ヲ奉還セラレ、繼デ我公(筆者注、会津藩主、松平容保を指す)又職ヲ失ヒ京師ヲ退クニ至ル。而シテ當時世人却テ我ヲ攻ムルニ覇府ヲ保庇シ維新ノ帝業ヲ妨グルモノトナシ、朝廷我ヲ罪スルニ禍心ヲ包藏シテ帝命ニ抗スルモノトナシ、哀願途絶ヘ愁訴計究リ、錦旗東征我境ヲ圧ス。(中略)此レ一二雄藩ノ陽ニ。幼主ヲ擁シテ陰ニ私怨ヲ報ズルノミト

主人公に言わせれば、江戸幕府として会津藩もまた近代国家建設のために努力しつつあったのであり、にもかかわらず「一二雄藩」、つまり薩摩と長州が「私怨」をはらすために、幕藩体制を崩壊に導いたということ

になる。このような明治維新観は、前掲の弟、柴五郎の手記に描かれた、散士の父親の「やれやれ会津の乞食藩士ども下北に餓死して絶へたるよと、薩長の下郎武士どもに笑われるぞ、生き抜け、生きて残れ、会津の国辱注ぐまでは生きてあれよ」¹⁷という言葉からも伺うことができる。会津士族に共有された明治維新観であつたわけだが、それはともかくとして、注目すべきは、このような主人公の歴史認識において、国家という存在の抽象度の高さこそが、郷土愛と国家愛を共存させる方向に作用していることである。会津と薩摩や長州は抽象度から言えば同じレベルに属しており、相対的に等価な存在である。それに引き替え国家とは、散士にとって、会津も薩摩、長州も、三百余州すべてを包摂する、もう一つ抽象度の高い觀念なのであり、だからこそ、国家は郷土と対立することはあり得ない。むしろその中に内包されることになる。「此レ一二雄藩ノ陽ニ幼主ヲ擁シテ陰ニ私怨ヲ報ズルノミト」という言辞が示すように、主人公にとって故国会津を滅亡に導いたのは、国家ではなく相対的に対立し得る薩摩であり長州である。会津滅亡は国家の要請に基づくものではなく、薩長の私欲と謀略の結果なのであり、むしろ、薩長が「私怨」に囚われた結果という意味において、倫理的規範に反する出来事として位置づけられることになる。先に引用した会津藩「主将」の、「神州ノ為メニ生命ヲ鋒鏑ニ委シ、而シテ是非正邪ヲ死後ニ定メンハ若カズ」という言葉も、以上のような明治維新観と呼応している。藩士が生き残り、国家のために身を投じることによつてこそ、会津藩が国家的障害として滅亡させられたわけではないことを証することができるという論理が、この言葉の背景にはある。

散士の主観は措くとして、このような思惟様式は、郷土愛と国家愛の共存を可能ならしめている。会津藩への忠誠は、その裏返しである薩長への恨みとして実現する一方、喪失した倫理的主体としての《私》を、国家との関わりの中で再編成することが可能となる。だからこそ、『佳人之奇遇』においては、かつてそこに帰属した、そしてすでに滅亡した会津と、現在帰属する、そして今後滅亡するかも知れない日本国家が、入れ子式

に配列され、二つの〈内なる国境〉が情緒のレベルで融合されることになる。『佳人之奇遇』に描かれた市民精神、あるいは国民観は、以上のように、さまざまな歴史的事情が複雑し絡み合って成立している。そして、政治参加主体Ⅱ倫理的主体としての〈私〉を希求する主人公の存在様式それ自体こそが、この物語におけるもう一つの政治性を形成しているのである。

注

- (1) 『文藝春秋』 昭和三〇・四―三二・三月、引用は『谷崎潤一郎全集』第一七卷中央公論社 昭和四三・三
- (2) 絵入自由出版社 明治一五・八月―一六・二一
- (3) 『自由燈』 明治一七・一二―一八・四、以下の引用は『明治文学全集』5 筑摩書房 昭和四二・八
- (4) 民友社 明治三四年五月 引用は岩波文庫
- (5) 五車楼 明治四三・五
- (6) 伊藤成彦訳『ルカーチ著作集』3 白水社 一九八六・一〇月
- (7) 博文堂 明治一八・一〇―三〇・一〇、引用は前掲『明治文学全集』6 昭和四二・八
- (8) 「民権文学の先見性」『日本文学』 一九八四・一一
- (9) 安丸良夫「民権運動における『近代』」『日本近代思想体系』 岩波書店 一九八九・一一
- (10) 『日本政治思想史研究』東京大学出版会 一九五二・一二一
- (11) 引用は『明治文化全集』第四卷 日本評論社 昭和三・七
- (12) この文献についてはすでに、越知治雄『近代文学成立期の研究』（岩波書店 一九八四・六）に言及がある。
- (13) 慶応義塾出版局 明治五・二―九・一一、引用は岩波文庫
- (14) 石光真人編著『ある明治人の記録』中公新書 一九七一・五
- (15) 『近代日本の文学空間』新曜社 昭和五八・六

(17) (16)
(15) 丸山前掲書
と同じ